

## 武田和正（中新川支部）の見学記：

11日（土）、富山県建築士会女性委員会主催の「国宝勝興寺見学会」に参加しました。

説明していただいた上村氏（高岡市教育委員会文化財保護活用課）の解説は、タブレットを駆使して、プラスアルファの知識も付与してくださるという素晴らしい内容でした。

現職の前に、高岡市の営繕課に配属されていたということで、われわれの質問に対してもすべての的確に回答していただいたことが納得できました。

今回の見学会で得た知識のいくつかを、忘れないうちに記録しておこうと考えてこの見学記をまとめてみました。

「鼓堂」は、その名のとおり太鼓が納めてある建物で、外観は城郭を思わせる望楼形式の入母屋造である。屋根は「柿葺（こけらぶき）」で、スギの薄い板（勝興寺ではスギが、瑞龍寺ではサワラが使われている。文化財の修理は、元々使われていた樹種と同じ樹種を使うことが原則。）を竹釘で張り付けている。元々は「宝蔵」の場所にあったのを移築したそうである。

「唐門」は、当初京都の興正寺の勅使門として建立されたが、明治26年（1893）に基礎の石材まで勝興寺に移築されたそうである。京都では、通常は扉が閉じられ木柵まで設けられていたそうだが、勝興寺へ移された後は、一般の門徒衆が自由に出入り出来るようになったとの事で、上村氏はこの門を案内するとき、“皆さん、天皇の勅使になったつもりで通過してください。”と言うそうである。屋根は、修理前の銅版葺を本来の檜皮葺（ひわだぶき、ヒノキの皮を張り付け）にしたそうである。前後唐破風造の門は、日光東照宮の陽明門と同じ構造だそうである。

「本堂」の面積は約40m（22間）四方、高さは約23m（6階建てのビルに相当）で、天井の「格天井（ごうてんじょう）」は3段階（民衆は通常の格天井、法主衆は格天井の枠が黒漆と金箔、阿弥陀様の空間は紺丹緑紫の彩色を施した格天井）で、タブレットでしっかりと見せていただいた。天皇や大名の場合は、さらに折り上げ格天井、二重折り上げ天井になっているそうである。

「本堂」の円柱はケヤキで、「建て登せ柱」という巨大な小屋梁を直接支える強い構造だそうだが、1本だけサクラが使われているそうである。その訳は、「満つれば欠ける」ということわざにもあるように「建物は完成と同時に崩壊が始まる」と考え、わざと未完成の状態にすることで災いを避ける目的で、1本だけサクラにしたそうである。日光東照宮の陽明門の逆さ柱も同じ理由で、一種の魔除けだそうである。

別の見方では、サクラはケヤキよりも耐久性が劣るため、サクラの腐朽状況を観察していれば、本堂の円柱の改修時期がわかり事前に対応ができるそうで

ある。事実、サクラの円柱の腐朽は本堂の床上まで進行していたが、ケヤキの腐朽は床下の段階までで、ケヤキの「根継ぎ」による修復は小規模で済んだそうである。

「勝興寺」の語源は、順徳上皇の勅願所であった「殊勝請願興行寺」を再興相続して「勝興寺」と名付けられたそうである。それは本堂に掲げられている扁額からも分かる。

#### 【勝興寺の寺号の補足（上村さんから）】

佐渡島で順徳上皇（1197～1242、1221年は承久の乱）が願って建てられた浄土真宗のお寺が「殊勝誓願興行寺」です。本堂にある扁額が「殊勝誓願興行教寺」の八文字となっているのは、扁額を作る際に、実際の寺号の7字だと（4文字と3文字となり）バランスが悪いので、当時、『教』という字を入れよう！という話になったのではないかと推測しています。

浄土真宗西本願寺派の寺院で、文明3年（1471）に本願寺八世蓮如が今の南砺市土山に建立されたのが起源で、戦国期には安養寺（今の小矢部市末友）に伽藍を営み、越中一向一揆勢の旗頭として威勢を誇っていたが、天正9年（1581）に焼失され、同12年（1584）に現在の地に伽藍を再興したとパンフレットに記されている。

「勝興寺」の重要文化財十二棟の保存修理は、平成10年（1998）に本堂から始まり、令和2年（2020）までの23年を掛けて、全ての工事が完了し、江戸時代の壮麗な伽藍が蘇りました。その後、「本堂」と「大広間及び式台」の二棟が、富山県で二番目の国宝に指定されました。因みに、国宝のない県は、徳島県と宮崎県の2県（2019年3月現在）だそうです。

「勝興寺本堂」が国宝に指定された理由は、主要木造建築物の規模で第九位（同五位の西本願寺阿弥陀堂の縮小版）と大きいことと、寛政7年（1795）に、加賀藩、西本願寺、門徒衆（民衆の寄進）の三者の協力によって建立され、地方に所在する由緒ある古刹の本堂として破格の規模と形式を備え、江戸時代中期以降の傾向を代表する本堂遺構の秀例として、高く評価されたことによる。

大広間の壁と襖の唐紙には、天皇家の象徴である「菊の紋章」と、歴史上天皇家と所縁の深い皇室が使用していた「五七桐花紋」が描かれている。「菊の紋章」と「五七桐花紋」を配することによって、勝興寺は、順徳上皇発願の寺であることを、歴史的にも由緒ある寺であることを、ことさらに強調しているように思われるのは、私だけでしょうか？

因みに、「五七桐花紋」は、歴史上皇室や政権担当者が紋章として使用していたそうだが、現在は、内閣総理大臣・日本国政府・内閣府が政府の紋章として使用しているそうである。

岸田総理大臣の記者会見の会見台には、紺色の地に「日本国」の文字の上に金色の「五七桐花紋」が付いているが、松野官房長官の記者会見の会見台には何も付いていないのを注意して見ていただきたい（上村さんはタブレットでその違いを即座に説明してくださった）。

書院には、勝興寺が所蔵している重要文化財「洛中洛外図屏風 勝興寺本（六曲一双）」の複製が展示されていました。「洛中洛外図屏風」と言えば美術の教科書でも紹介され、高名な大名屋敷や京都の有名寺院でしか拝観できないものと思っていました、県内の寺院が所有していることは驚きであり、誇りに思います。

#### 【洛中洛外図屏風の補足（上村さんから）】

お寺に飾ってあるのは複製で、本物は『高岡市美術館』で保管されています。勝興寺では、温湿度を調整できる保管場所を有していないため、勝興寺が高岡市美術館に保管をお願いしています。

実は、平成14年（2002）6月20日（水）に、建築士会高岡支部主催の「勝興寺保存修理見学会」が開催され（23名参加）、自分も参加していました。

本堂全体を大きな建屋で囲い、周囲に張り巡らされた足場を登って、本堂屋根下地の「こけら葺」の現場を見学し、本堂軒四隅を支え続けて居る猿（あまのじゃく）も至近距離で観察することができました。私が写真に納めたのは、パンフレットから推測すると「南東の猿」のようです。

解説していただいた上村さんからは、実にたくさんの興味深いお話を聴かせていただいたのですが、年齢のせいで、これだけ思い出して整理するのがやっとでした。当日は、他にも多数の団体さんや個人の見学者が訪れていて大盛況でした。

見学会を企画していただいた女性委員会と解説していただいた上村さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。